



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和5年 4月 7日 4月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

「小規模校」のメリットを生かした学校づくり

校長 黒木 健

約3年に及んだ新型コロナウイルス感染症対策にもようやく出口が見え始め、マスクを外しての新学期を迎えることができたことに、大きな安堵感を感じているところです。ご入学・ご進級、誠にありがとうございます。本校に着任して4年目を迎えることができました。引き続き、本校教育活動へのご理解・ご協力のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

さて、今年度最初の「学校だより」は、改めて「小規模校」をテーマに話をさせていただきたいと思います。令和4年度末現在、本市には335校（分校及び義務教育学校前期課程を除く）の小学校が存在しますが、本校のように児童数が200名程、或いはそれ以下の小学校は、市内に数える程しかありません。さて、この「学校だより」をお読みいただいている方々は、小規模校にどのようなイメージや思い、そして願いをお持ちでしょうか。私は本校着任前、本市南部の小規模校の小学校（児童数250名程）で5年間、校長を務めさせていただいた経験がありますが、先ず、個人的見解を述べさせていただけるのであれば、私自身は小規模校に大きなデメリットがあるとは感じておりません。

小規模校のデメリットとしてよく取り上げられる事項としては、a. 常に少人数の環境下にあるため、児童の人間関係が固定されやすいのではないかと、b. 児童間の人間関係が上手くいっていない時でも、単級であるためにクラス替えがなく、新たな人間関係を育み難いのではないかと、c. 児童数に比例して教職員数も少ないため、一人当たりの業務量が多くなり、それが教職員の働き方改革の障壁になっているのではないかと（学校規模に関わらず、学校全体に係る業務量にはそう大きな差はないため）等が考えられます。確かに部分的にはそうした状況が発生していることも認めざるを得ませんが、その一方で、それを凌駕する小規模校としてのメリットがあることも見逃してはならない点だと捉えています。

本校では、少ない児童数の中にあっても、年間を通じた「ふれあい活動（異学年交流）」を主軸に、人権教育等の観点も入れながら、児童の中に新しい人間関係が育まれるよう、そしてそれが日々の学習や学校行事などに相乗効果を及ぼすことができるような学校運営をこれまで心がけてきました。また、本校の重要指針の一つでもある「いじめの未然防止」、及び「いじめ問題への迅速な対応」については、児童数が少ないからこそ、担任教諭以外の教職員でも学校全体の児童に意識を及ぼすことができるという大きなメリットがあると、これまでも様々な機会を通じて指摘をされてきたところでもあります。そして、我々教職員の業務内容についても、様々な観点から整理再構築を行い、働き方改革を推進してきました。そうしなければならない最大の理由は、一人ひとりの教職員の心の健康が保持されなければ、健全且つ持続可能な教育活動を行うことも叶わないと考えるからであります。今年度も引き続き、小規模校であることのメリットを最大限に生かしつつ、「一人ひとりの子どもの心に配慮した学校づくり」を目指してまいります。